

研究区分	教員特別研究推進 教育推進
------	---------------

研究テーマ	コロナ禍で基礎看護教育を受けた看護師の卒後支援に関する研究				
研究組織	代表者	所属・職名	看護学部・教授	氏名	林 みよ子
	研究分担者	所属・職名	看護学部・教授	氏名	山田 紋子
		所属・職名	看護学部・講師	氏名	前野 真由美
		所属・職名	看護学部 助教	氏名	鈴木 郁美
		所属・職名	看護学部 助教	氏名	中岡 正昭
		所属・職名	看護学部 助教	氏名	星 有紀
		所属・職名	看護学部 助教	氏名	長谷部 美紀
	発表者	所属・職名	看護学部・教授	氏名	林 みよ子

講演題目	新型コロナウイルス感染症拡大初期の新人看護師の体験
研究の目的、成果及び今後の展望	<p>【目的】新型コロナウイルス感染症（以下、コロナ）は看護学教育にもさまざまな影響を及ぼしている。コロナ禍で就職した新人看護師に対する教育方法やその効果は報告されているが、当事者である新人看護師の主観的な体験はほとんど報告されていない。そこで、彼らの体験を踏まえた卒後教育を検討するため、まずコロナ感染が拡大し始めた時期に看護系大学を卒業した新人看護師の体験を質的に明らかにすることを目的とした。</p> <p>【成果および今後の展望】2019年度卒業の看護師（以下、19年看護師）3名、2020年度卒業の看護師（以下、20年看護師）4名を対象に面接法でデータを収集し、質的記述的に分析した。19年看護師は、1年目の終盤にコロナ禍を体験していた。勤務病棟がコロナ病棟に変更された者は、コロナに関する詳細な知識提供がないまま日々変化する状況の中で先が見えない不安を抱えてその時にすべきことに没頭し、それ以外の者はいつもと変わらず勤務していたが、コロナ病棟となったり病棟内クラスター発生によってゾーニングなど具体的な感染予防策をレクチャーされることで次第に緊張を高めたりした。一方、20年看護師は、大学4年次は臨地実習できなかったが、3年次までの臨地実習経験があったため、コロナ患者を看護すること・自分自身の感染の可能性に不安はあったものの、この時期に看護職者になるという士気を高め、覚悟を持って就職した。1年目は、1年ぶりに医療現場に立つことや患者に関わることへの緊張・不安、先輩看護師との関わりへの困惑を抱え、目の前の課題に取り組むことで精一杯であった。勤務病棟でコロナ患者を受け入れるようになった・病棟内クラスターが発生した者は、感染拡大や自己の感染の可能性に緊張をしながら、レクチャーされた感染予防対策を1つ1つ慎重に確認しながら行動した。また、19年看護師も20年看護師も、21年看護師について、1年目同士の交流の少なさや仲間と学ぶ姿勢の希薄さを感じながら、大学3年次に臨地実習ができなかった後輩をどのように支援すれば良いのかそれぞれに模索しながら支援していた。以上のことから、新人看護師の体験は、大学での臨地実習状況、勤務病棟でのコロナ患者の受け入れ状況、コロナに関する教育などの影響によって様ではないことが示唆された。今後も調査を継続し、分析を洗練させて、彼らの体験に応じた卒後教育を検討する必要がある。</p>